

二 信心にて御慰み候

信仰は賣物ではありませぬ。宗教は利用すべきものではなくて、渴仰し服従し歸依すべきものであります。大方の信心を云爲する人々は、信仰を以て人格を磨き上げる砥石のやうに思ひ、一時の苦悶を拂う酒のやうに思ひ、地獄を逃るゝ辨護のやうに思ひ、極樂往生の路金のやうに思ひ、社會國家改良の肥料のやうに思つて居る人が多いやうである。けれどもこんな考へでは、眞實の信仰は得られない。従つて之を利用することも、應用することも出来ぬ。甚だしい自家撞着の結果に陥るのは情ない。信仰は痛切なる自覺の賜物である。この一念こそ、眞に信樂開發の時刻の極促であつて、また廣大難思の慶心を彰するのであります。

今はむかし、上州宇都宮の或る木賃ホテルに、一夜五人の合宿者があつた。宿屋は可成の構へであつたが、五人が一人々々ではと云ふので、皆一間に集まつて火鉢をかこむ。何れも見知らぬ顔なれど、何分合宿者の事とて、徐々馴染が付いて「あなたは何國ですか」「ハイ私は越後です」「あなたは?」「ハイ私は九州です」と各語り合ひ初め、職業しらべにまで移つて、イヤ禪宗の和尚さんもあれば、お侍も、百姓も町人も、御同行もあるといふ風すると年頃五十位の老人、お侍さんが、一義持ち出した。「扱て皆さん、お互に遠國の者ですが、斯うして一夜同じ宿に泊るといふも何かの因縁。それに職業も夫々違つてゐる。一つこの土地の宇都宮といふことを入れ、且つ今迄誰も知らぬ間柄であつたから、「誰も知るまい」といふ句を終につけて、一首づゝ歌を詠んで樂まうぢやありませんか。また好い思出の種ともなりませう。「イヤそれも面白うござらう」と一同賛成をした。中には歌など詠めぬと辭退した人もあつたが、折角の思立といふので愈それに決まつた。

サア、さうなると、誰から彼からの詮索はさておき、云ひ出したお侍さんから始め、あとは右へ順次といふことになつて、お侍さん先づ口を開いた。

鑄刀ぬいてかたきを宇都宮、かたきあるとは誰も知るまい

「成程。これはお侍さん、すればあなたは、敵打のために諸國修行でございますか。それは随分のお骨折り」。「サア今度は右隣の商人さんぢや」。「私はこんなことは出来ませんが、マア併しやつてみませう」。

朝起きて洗手拍手宇都宮、あひの符帳は誰も知るまい

「ヤアこれはよく出来ました。あの符帳だけはほんに誰にも解らぬ。サア、今度はお百姓さん、あなたの番ぢや」。「エツ私もかへ。私は何も知らぬが……」。「詠まんと云ふことは出来ぬ約束ぢやから」。「そんなら一つ……」

朝夕に田畑の塊を宇都宮、結實とるとは誰も知るまい

「いかにもよくできました、お蔭で御飯が頂かれます」と云つてる處へ、宿の主婦さんが、「何事ですかへ」とやつて来て、お百姓さんの左へべつたり据つた。「サア、あなたも此處へ据つたが因果、一首詠まねばならぬ。實は斯様々々の次第で、皆が一首づゝ詠む筈ぢや。サアお詠み。主婦さんもさるもの、ぬからぬ顔で、「へイ、私までが皆さんのお仲間入りですかへ。そんなら一つ詠みませう」。

朝起きて燧石かどいし宇都宮、粥を炊くとは誰も知るまい

「これはお上手々々。打ち明けられたところ面白い」。「今度は和尚さん」。「うむ、俺かへ。とうくお鉢がまはつたな。よしく」。

朝夕に簾鉦木魚を宇都宮、嬪があるとは誰も知るまい

「これは愈以て面白い。さすがは禪宗の和尚さんだけはある。包み隠しが

ない。「サアお次ぢや」。「それなら私も一つ詠みませうか」、

朝夕に案じて胸を宇都宮、今の安氣は誰も知るまい

「ほんに皆さん、お耻かしうございませうが、私は長らく、我身の一大事、心の落着き場所には、案じ煩ひ苦しみ悶えましたが、今は愈大願業力の不思議で、私の力ではない彌陀の御力で、往生一定御助け治定と安堵安心いたしました。私が案ずるよりも、阿彌陀如來様の私を案じて下さるのが強かつたのです」と、そろく自分の法悦話をしかけたので、一同笑ひ崩した襟を正し、夜更けまで御同行の法話を聞いたとの事。

誰しも、心の落着きを先づ第一に定めねばならぬ「佛法は心のつまるものかと思へば、信心に御慰み候」と、いつ思ひ出しても喜ばして下さるのは御信心であります。今の安氣は誰も知るまい、ほんに仕合者である。